



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# 財務会計の基礎 [講義ノート]

矢作 恒雄

## はじめに

このノートは、学生時代は勿論、実務においても会計・経理には全くといってよいほど縁のない管理職の人達を念頭におき書かれている。著者が商社に入社した昭和40年頃は営業畑の人間は著者のような新入社員はもとより管理職といえども如何にして売り上げを上げるかを考えていれば、まず充分であった。高度成長期にあっては、営業や製造の人間が損益計算書や貸借対照表を見て議論する暇があったら、商品を一つでも余計に売ったり作ったほうが会社にとって明らかにプラスになったのである。

しかし、最近のように高度成長時代が終わり、競争のスケールがグローバル化しつつ勝負のスピードが早くなってくると、担当業務が財務・会計・経理と直接関係はなくとも、常に自社及び競争相手も含む関係他社についての収益構造や資産・資本構成といった全体像を把握しているか否かは意思決定の質に致命的な違いをもたらす場合が増えてくる。あることに関する知識がないということは、それがどんなに重要なことであってもその重要性にすら気付かない訳で、外からみると何とも恐ろしいことである。無謀運転をみて我々が心配し恐ろしく思うのはそうするとどうなるかの知識が蓄積されているからであり、一方未熟者は知識が無いためその恐ろしさを自覚していないからであるのと似ている。

さて損益計算書や貸借対照表に関する勉強といえば会計学ということになるが、「会計学」という言葉からおそらく多くの人達は簿記を思い浮べるであろう。実際会計学に関する解説書をみると殆ど例外なく簿記についての解説があるか、あるいは簿記の知識があることを前提にして話が進められている。大体会計の部外者が「部外者」意識を持つ直接のきっかけはこの簿記ではないかと著者は自分の体験から殆ど確信している。

確かに、複式簿記のメカニズムはうまく工夫され精緻に組み立てられている。それだけに、会計の専門家は「複式簿記が解らなければそのまとめである財務諸表が理解できる訳がない」と主張する人達が多いし、正しいと思う。しかし、複式簿記の勉強がとっつき難いのために、途中で挫折するような人達は損益計算書や貸借対照表といった財務諸表を読みたいと願う資格すらないのであろうか。本書は、そのような人達のために、敢えて多くの専門家の批判を覺悟の上で、帳簿をつけるなどという作業には一切手を触れず（そういう作業を軽蔑している訳では断じてない）、しかし複式簿記の基本的メカニズムについてはき

10

15

20

25

30

35